

シノドスへの歩み 東京教区のこれまでの歩みを振り返る

その三 1990年代の東京教区：国際化する教会

小西広志

2022年4月22日

はじめに

皆さん、こんにちは。東京教区シノドス担当者の小西広志神父です。

1989年1月7日に昭和天皇が崩御され、新しく平成の年号へと変わりました。世界各国は民主化への歩みを進めていきました。中国で天安門事件が起きたのもこの年です。翌1990年には東西ドイツは統一され、強固と思われた社会主義、共産主義陣営の結びつきは内側から失われていきました。1991年にはソビエト連邦も崩壊しました。また、その一方で湾岸戦争が勃発し、世界は東西対立ではなく、南北間の格差と対立という新たな問題を抱えるようになったのです。20世紀の最後の10年、東京教区はどのように歩んだのでしょうか。簡単に眺めてみましょう。

NICE-2へ

第1回福音宣教推進会議（NICE-1）を受ける形で東京教区ではいくつかの取り組みが少しずつ実っていきました。教区内の小教区間の連携を深めるために情報センター的な役割としてTCCCが設立されました。また信徒の生涯養成として数々のプログラムが企画されました。合宿のような形での一泊交流会「みんなで話そうよ」も生まれました。さらには東京教区国際司牧センター、TIPCも設立され、在日ならびに滞日外国人への関わりも組織的に始まりました。さらには情報誌「ゆーとぴあ」が発刊され、それが「すくらんぶる」という情報誌へと発展していきました。

そういった動きの中で、第2回福音宣教推進全国大会（NICE-2 ナイス・ツー）が前回のNICE-1の精神を継承する形でテーマを「家庭」として1993年10月21日に長崎で開催されました。それに先だつ1990年には東京教区の中にNICE-1の「教会の運営に女性の対等な参画を」という提案を受けて「女性と教会」委員会が設立されました。教会における女性の役割と女性の豊かさを引き出すことを目指した同委員会は、教会、社会、家庭での女性の意識の現状を把握することから始めました。また、東京教区「正義と平和」委員会が設立されたのもこの頃です。1991年には教区内に部落問題委員会が設置されています。

湾岸戦争では日本の教会は避難民の移送に積極的に関わりました。それは、国際貢献のかけ声の中で自衛隊

が紛争地域へ派兵されることへの反発でもあったと思います。民間機をチャーターし、二度にわたって避難民を移送しました。多くの信徒がそのための募金活動に参加しました。

外国籍の方々と共に

1990年代に入り、日本の社会では外国籍の方々が増えてきました。ある人々は新しく仕事を求めて来日し、ある人々は過疎化が進む地域の農業・漁業などの担い手として来日しました。当時は日本の経済発展と国際化の結果、滞日外国人の増加があると考えられていましたが、実はその頃から日本の少子高齢化が深刻になりつつあり、外国籍の方々と「ともに喜びをもって生きる」(NICE-1の標語)社会を築き上げる必要があったのです。

1990年には東京韓人教会が関口教会へと場所を移しました。そして、司牧の任にあたらる司祭が韓国から派遣されました。東京教区内の各地の小教区共同体ではフィリピンの人々、ベトナムの人々が集うようになりました。日本人と外国籍の方々との交流をめざした信仰の共同体づくりへの模作がなされていったのです。

1995年、戦後50年を迎えて、前年に枢機卿に親任された白柳誠一大司教は1月にマニラで日本の戦争責任を明言し、フィリピンの信者の前で謝罪をしています。8月には司教団は教書「平和への決意」を発表しています。

外国籍の方々との地道な関わりは次第に実りを結んでいきました。毎年、インターナショナルデーを開催したのもこの頃です。そして、1997年には東京教区の司祭研修会からの提言「滞日外国人に対する司牧責任を果たすために」に答える形で、白柳枢機卿さまは「人間への共感をバネにして」という教書を発表しています(5月18日)。そこでは、困難に直面して苦しむ人々を無視することはキリストの教えに背くものであるとし、滞日外国人司牧の必要性とその使命が記されています。

すでにカトリック東京国際センター(CTIC)は1991年より活動を開始しており、東京教区全体で外国籍の方々への関わりがなされていったのです。

東京教区 100周年

東京教区は1991年に教区設立100周年を迎えました。同年9月より一年間、記念の年としてお祝いしました。白柳誠一枢機卿さまは教区100周年にあたって、教書を発表しておられます。そこでは次のように記されています。

感謝、確認、未来へ

「過去に感謝し、今を確認し、明日に向かう」これが、100周年を迎える私たちの気持ちであります。

東京教区の役割 また次のように国際化する日本社会にあって東京教区の役割をまとめています。

人は皆、国籍、民族の違いを越えて、神の前で兄弟姉妹であるという信仰を具体的に証しすることは、日本の教会の重要な使命でもあると考えます。

幸い、教区の中には、それぞれの立場から、さまざまな形で、在日・滞日外国人の方々を兄弟姉妹として受け入れ、その喜びや悲しみに共感し共に歩もうとする多くの善意ある人々がおられます。教区としては、こうした人々の活動を支援すると同時に互いに協力して、より豊かな実りをあげることができるように、今春ようやく国際司牧委員会・国際司牧センターを発足させたばかりであります。

私たちは、教区創立 100 周年にあたり、教区をあげてこれらの諸活動を支援し充実させることが時代の要望にもかなうことであると判断し [ました]。

実り

東京教区 100 周年の記念事業は 1991 年 9 月から翌年の 9 月まで一年間続きました。先に述べましたように、カトリック東京国際センターなどの組織が教区内に整備されました。また、インターナショナルデー、子どもミサなどの催し物を開催し、大きな成果をあげました。特に子どもミサは各小教区共同体の教会学校の子どもたちがカテドラルに一堂に会する大きなイベントとなりました。インターナショナルデー、子どもミサのどちらも一回限りの催し物とせず、毎年継続していきました。

まとめ

1990 年代は東京教区にとって、世界に目覚めた時だったかもしれません。日本が国際社会で果たす役割が問われて続けたこの 10 年は、教区にとっても外国籍の方々との「共生」が問われた 10 年でもあったようです。さらには、戦後社会の繁栄にかげりが見え始め、後に「失われた 10 年」と揶揄される 1990 年代を生きながら、東京教区は社会の矛盾と困難に直面する人々と共に生きようとしてきたのです。